目　次

第一部　可能に関するもの
第一章　可能動詞の成立……3
第二章　可能動詞の発達……23
第三章　江戸後期の可能動詞……46
第二部　打消に関するもの
第四章　ロドリゲス『日本大文典』の「ないで」……66
第五章　打消の助動詞「ない」の発達……89
第六章　いけねへ・いかねへ・いかれねへ……107
第三部　活用に関するもの
第七章　近松世話物における二段活用と一段活用……129
第八章　ラ行下二段活用の四段化……158
第九章　近世におけるサ行四段活用のイ音便……186
第四部　敬語、自動詞・他動詞、補助動詞、接続助詞などに関するもの

第十章　「だのに」と「なのに」……215
第十一章　「浮世床」「浮世風呂」のテルとテイル……240
第十二章　おんぶする……257
第十三章　居られるという言い方について……285
第十四章　「おられる」再考……315
第五部　文体、語の用法、方言、位相などに関するもの
第十五章　洋学者の思想と文体……337
第十六章　「好色伝受」のことば……358
第十七章　読みと文法……373
第十八章　上方語と東国の言葉―話し言葉の中の方言―……383
第十九章　近松と西鶴―『好色五人女』と『大経師昔暦』……393
第二十章　近世語法研究の現況……406
初出一覧……422
あとがき……424
索　引……426

第一部　可能に関するもの

第一章　可能動詞の成立

はじめに

「書ける」「走れる」「飲める」「読める」のような、それぞれ五段動詞「書く」「走る」「飲む」「読む」から派生される同行下一段活用の動詞を今日では「可能動詞」とよんでいる。

さて、それでは一体この可能動詞はいかにして成立したものであるかというと、それについては諸説があって未だ定説なしというのが実状のようである。そこでここでもまた、いわゆる可能動詞の成立についての一つの考えを提示してみたいと思う。ただ、ここではいわゆる可能動詞の発生の期と考えられる室町から江戸にかけての時期を中心にとりあつかうつもりである。

それでは次に、抄物資料・キリシタン資料・狂言資料について可能動詞に関連があると思われるものについて記していく。

一、抄物・キリシタン・狂言資料にみられる、いわゆる可能動詞と関係のある語

(1)抄物について

まず蒙求抄[注一]に見られる例を示す。

「淮南子、書テハ、クハイナンジ、口チテ云フ時ハエナンジソ、叢林ニハ、ワイトヨムルカ、コチニハ、クワイトヨムソ」（第七巻三十三丁表）

問題は右の「ヨムル」の意味であるが、いわゆる可能動詞と同じような意味にもとれ、また「四段動詞＋完了の助動詞」の「ヨメル」と同意であるようにも考えられる。

右の解釈のうち、意味の上からすればここでは後者の「四段＋完了の助動詞」とする考えが適当のようにも思われるが、そうであるとすれば、ヨメル、が当時の規範意識によって、ヨメル→ヨムルの逆変化をとったものと考えなければならない。（ただし、そのようにして出来た「ヨムル」の活用が、この限りにおいては、(イ)完了の助動詞「リ」を活かして四段であったのかそれとも、(ロ)新しく「ヨムル」なる下二段として活用したのかは不明である。）このような逆変化の例は抄物においては見られぬこともないのであって、例えば論語鈔[注二]には「聞ユ」を「聞ウ」とした例（巻六）や、「越ユル」を「越ウル」とした例（巻十）が見られるが、この蒙求抄においてはそのような逆変化の例は見えない。そこで、一方これと別の見方で「ヨムル」を今言う可能動詞の意とすれば、可能動詞はもともとは二段活用にその源をもつものであり、それが下一段活用として認識されてきたのはすでに二段活用動詞の一段化というものが完了していった頃に多く用いられてきたからではないか、ということが推測されてくる。しかし、右に見る限りでは「ヨムル」が

可能の意を有するものであると言い切ることはできない。

ただ、ここで次のような例がある。

「両ノ足ヲキラレテハ、何カイキラレウソ。足ノスヂヲキル〕ヂヤトヨメテ候ソ」（第三巻三丁表）

右の「ヨメテ」を見るときこの中に「四段＋完了の助動詞」の意を汲みとることは出来ない。「ヨメテ」を見ることにより、先ほどふれた「ヨムル」についての、(イ)「ヨムル」を四段とする説は消えたものとしてよいであろう。そこでこれは、(ロ)の新しく生じた「ヨムル」なる下二段活用語（ヨムルの「ル」は完了の「リ」出自のもの）としてよいかということになるが「ヨメテ」を見る限りにおいては、その中に完了の助動詞「リ」は見出せない。これについて、一旦生じた、「リ」を含んだところの「ヨムル」の連用形であるから、その「ヨメテ」には「リ」の意味が含まれているとするのはあまりにも飛躍した見方というべきであろう。しかし、ここではそのようなくだくだしい言い方は不要であると思われる。先の例文の「ヨメテ」を見れば、それが今言う可能動詞の意味に最も近く、その「ヨメテ」の中に完了の助動詞の含まれているが如き解釈をせねばならぬ必要は認められないのである。

次に、勅修百丈清規抄[注三]に見える例を示す。

「文字ハヨムルトモ理ハキコエマイゾ」（四巻十六ウ）

右の「ヨムル」が、今日言うところの可能動詞としての「読める」と同じ意味であることは明らかであろう。参考すべき例として同じ丁に次のような例がある。

「新住ヲ不〕知シテハフツトヨメマイソ」（四巻十六丁ウ）

これら二例をあわせ見れば、可能動詞（可能の意を有する動詞とした方が誤解を招かないが）「ヨムル」なる下二段活用語が存在していたことはどうやら認めてよさそうである。

また、これに類する例として史記桃源抄[注四]に次のような例がある。